

土に還る(4) 藁で生きる

エッセイ 大江戸エコロ帖
◆第九回◆

文／石川英輔

江戸時代後期の日本では、一年間に米を450万トンぐらい生産していたが、同時にほぼ同じぐらいの重量の稲藁ができた。われわれの先祖は、長年にわたって米の品種改良を行ってきたが、その目的は良質の米をできるだけ多く得ることではなく、藁の生産量を増やすことも重要な目的だった。世界中に稲作をする民族は多いが、藁の生産量を増やそうとして品種改良を続けたのは日本人だけだ。藁の用途が衣食住のすべてに及んでいた日本の社会では、藁の需要がきわめて多かったからである。

衣、つまり身に着けるものとしては、雨具の蓑、農作業用の背中当て、漁師の腰蓑、わらじ、藁草履などが、藁製の蓑は昭和20年代頃まではまだ農村で使っていたし、藁草履はもともと後までごく普通に履いていたものだ。蚕にまゆを作らせるときに糸を掛けやすいようにする「蓐」という道具も藁製のものが多い。

図版／さまざまな形の藁や藁製品。江戸時代というより昭和30年代頃までの日本は、米の副産物である藁で多種多様な日用品などを作っていた。【北斎漫画より】



かった。できた絹は衣服になるのだから、これも広い意味では衣服用と考えていいだろう。

人間は藁を食べても消化できないため、さすがに直接口に入れることはないが、食料を作る道具として藁の用途は広がった。

藁は良質の肥料になるため、日本では生産量の半分ぐらいを堆肥、あるいは厩肥として使っていた。厩肥とは家畜の敷き藁を堆肥化したもので、普通の堆肥より肥効がすぐれている。また、糸引き納豆を作るのに、かつては蒸し煮した大豆を藁で包み、藁についている天然の納豆菌によって発酵させた。

住居用にもさまざまな形で藁を使った。茅葺屋根を葺くためには大量の藁縄が必要であり、土壁には、短く切った藁をササとして混ぜる。こうすると、壁が補強されて一種の複合材料となり、亀裂を生じにくくなった。

このようにきわめて用途の広い藁は、けっ

して丈夫な素材ではない。たとえば、わらじを履いて一日歩けばすり減ってしまうが、丈夫でないことも欠点ではなかった。道端に捨てておけば自然に土に還ったし、交通量の多い街道筋では、旅人の捨てるわらじを農家の人が持っていくって堆肥の材料にするのが普通だった。

近代文明の生み出した丈夫で変質しない素材と違って、純粹な天然素材の藁は確実に土に還るため、近代的廃棄物の生み出すさまざまな環境問題とは無縁だったのである。

いしかわえいすけ
作家。著書に、江戸時代の資源やエネルギーの循環について紹介した「大江戸リサイクル事情」大江戸えねるぎ「事情」などがある。

洗剤いらずのエコなクロス

少しの汚れなら、これがあれば水だけでOK! 「巻きまき がんこクロス」は、2種類のゴムの微粒子を配合した繊維でできており、水をつけると簡単に汚れを落とせます。程よい柔らかさがポイントで、ぞうきんのような使いやすさ。洗って何度も使用でき、洗剤を使用しないので、水を必要以上に汚すこともありません。使いやすい大きさにカットして食器洗いやガスレンジのお掃除などにどうぞ。



有限会社がんこ本舗 (電話0120-082-369) <http://www.gankohampo.com>

リサイクル素材のエア「バッグ」

車の廃エアバッグを利用して作られたカジュアルタイプのショルダーバッグ「Air Moon」。ボディだけでなく内部やポケットにも廃エアバッグを利用してあり、ファスナー部分には廃車レザーシートが使われているなど、全体の70%が廃素材でできています。廃エアバッグは、通常のナイロンを上回る強靱さと、つややかでなめらかな質感が特徴。また、一つ一つ異なる独特の「しわ感」や色味も愛着を深めてくれそうです。



イノベコ (電話0466-60-3939) <http://www.innoveco.jp/product-4th.htm>

エコモノたちで、
あなたの暮らしを
彩りあるものにしてみませんか。

ティータイムの使い捨ては、卒業!

メッシュになった、果実をかたどった部分に茶葉を入れて利用する「フルーツティーストレーナー」。スティック状になっているので、お茶を入れるのも、入れた後で茶葉を取り出すのも簡単です。洗って何度も使えて、ティーバッグを使い捨てることなく、ティータイムをエコに過ごせます。置いておくだけでもかわいいカラフルなフルーツモチーフは、洋なし、いちご、レモンの3種類です。



ホッチポッチ (電話03-3717-6911) <http://www.rakuten.ne.jp/gold/hotch-potch/>

エコモノ